

ジッドとデュ・ボスの未刊書簡

吉井, 亮雄
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7329805>

出版情報 : Stella. 43, pp.43-58, 2024-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de
l' Université du Kyushu
バージョン :
権利関係 :



ジッドとデュ・ボスの未刊書簡

吉 井 亮 雄

筆者はすでに別稿で 1950 年刊のアンドレ・ジッド＝シャルル・デュ・ボス往復書簡集¹⁾や以後公表の補遺数点から漏れていたジッド書簡 2 通を紹介しているが²⁾、幸いにもその後、両者が交わした若干数の未刊書簡を新たに確認・参照する機会を得た。当該コーパス全体には依然として一定数の遺漏があると推測されるが、とりあえず本稿ではこれらの新資料を簡略な補説と附註を添えて訳出・提示しておきたい。

＊

第一次大戦勃発後、ベルギーおよびフランス北部からの避難民が急増してくると、ジッドとデュ・ボスは 1914 年 10 月、彼らを対象とした救援活動組織「仏白の家 (le Foyer Franco-Belge)」を設立し（当初はラ・モット＝ピケ大通り、次いでロワイヤル通り、最終的にはシャンゼリゼ大通り 63 番地に本拠を置く）、ベルギーのデル・マルモル男爵を会長に仰いで共に副会長に就任、まさに寝食を忘れて活動・運営に専念するようになる。以後の日常的な遣り取りをつうじて二人の関係は堅固なものとなってゆくわけだが、以下に訳出するのは活動開始から半年後、ある避難民の資格認定についてデュ・ボスがジッドに意見を求めた書簡。ちなみに文中の略号 C.C. は「中央委員会」^{コミテ・サントラル}の管轄下で分類・認定された避難民³⁾。これに対し、おそらく B はベルギーからの避難民、F はフランス北部からの避難民に与えられていた組織発足当初の分類呼称である――

《書簡 1》デュ・ボスのジッド宛⁴⁾

「仏白の家」

被侵略地域からの避難民支援

ロワイヤル通り 20 番地（8 区）

〔パリ〕, 1915 年 4 月 11 日〔日曜〕

我が親愛なる友

私をひどく悩ませているロベールのケースをご審査いただけないでしょうか？ 彼は長いあいだ我々のクロークで働いていて、つねづね私が高く評価してきた人物ですが、

明朝クリシーのショコラトリ・カルバンティエに入社します⁵⁾。しかしながら、そこは〔避難民用アメリカン・ホステルのある〕テプー通りからは遠すぎるため、最初の給料が出るまでのあいだは、食事のために〔ホステルに戻って〕来られないのです。彼の登録番号は1657です。つまり〔分類上は〕まだ以前のBであって、C.C.ではありません。〔したがって〕当面は単発の補助金以外に解決策がないケース、大いに心を動かされはしますが、〔同時に〕経費のかかるケースとなります。こういった人たちの場合、就業開始時にはそれ以前よりも多くの費用がかかってくるわけです。審査の結果、過去には何人かのFに補助金を与えたこともありましたが、しかしC.C.ではないBの場合はどのようにすべきでしょうか？ あなたはこういった点について大いに経験がおありなので、審査・決定をお願いできないでしょうか？

衷心よりあなたの

シャルリ

委員会の後に少しばかりお時間をいただけるならば、V・R夫人とあなたとで、私たち3人ともどもに関わりのある2家族のことをお話しする必要がありますでしょう。

追伸中の「V・R夫人」が、ジッドの盟友とも呼ぶべき存在として、しばしば彼とデュ・ボスの間を取りもったマリア・ヴァン・リセルペルグ、通称プチット・ダムであることは断るまでもあるまい（たとえば後掲の《書簡7》を参照）。

次に訳出するのは、救援活動が続くこの翌年デュ・ボスがジッドに宛てた生憎あいにくの留守を詫びつつ友情を確認する書簡。なお、文中に名の挙がるジョルジュ・ド・ローリスはプルーストの忠実な友人で、彼もまた「仏白の家」のメンバーであった⁶⁾——

《書簡2》デュ・ボスのジッド宛⁷⁾

「仏白の家／避難民用アメリカン・ホステル」相談所

テプー通り18番地（9区）

〔パリ〕, 1916年5月30日〔火曜〕

親愛なる友

今晚帰宅し、あなたの親切なお手紙を認めて、まことに心を打たれました。すでにローリスから聞いて、拙宅においていただいたとは存じていましたが、嗚呼！ 私が〔日中に〕在宅していることは決してないのです。次にお越しになるときは、前もってお知らせください。必ずお会いできるようにいたします。私もまた、いかに長い手紙であれ、それでは決して伝えきれぬ数多の事柄について、あなたとお話しできていれば、なんと喜ばしいことだったでしょう。したがってこれらの事どもは、戦後まで取っておかれるべき、その他多くの佳きこと、美しきことと同様、今後のためということにいたしましょう。自分が大きな価値をおいている愛着の念を私は一瞬たりとも疑ったことはありません。私たちが共に過ごした美しい時間の記憶は、不思議な力で描か

れつつある作品の——すなわち私たちの将来の親密さの——前奏曲として私のなかに生きています。

とりあえずのところは、どうか私の心からの誠実な想いをお受け取りいただきたく
シャルル・デュ・ボス

＊

終戦後の1920年、デュ・ボスは外国文学に対する深い造詣を買われて『新フランス評論』への寄稿を始めるが、同時にこの年下の友人との会話、「思考の親密な戯れ」に魅せられたジッドは「彼に『日記』を書きつづけるよう強く勧める」——「『日記』のなかでは、論説だとあまりにしばしば失われてしまう彼の最良の部分が示されるだろう」⁸⁾。さらに両者は、1922年に再開されたポール・デジャルダン主催のポンティニー旬日懇話会の中心的存在として、催しの企画や参会者の人選にとともに深くかかわってゆく⁹⁾。

1924年末から翌年初頭にかけてデュ・ボスは、結局は頓挫するものの、『テクスト (Textes)』のタイトルのもと、汎欧的な性格を備えた文芸誌の創刊を企画し、版元としてグラッセに話もちかけている。彼の『日記』(1月19日付)によれば、一例として挙げた「ジッドの寄稿と、〔ベルクソンの〕『形而上学入門』を再掲するという〔彼の〕アイデア」がグラッセの編集者を喜ばせた。また具体的な作業としては、当の「ジッドの分にかんしてはもはや為すべきことはない。〔私の女性秘書〕ポール〔・レルシュ〕が今日の午後、校正刷に欠けていた8頁ほどをタイプしたので、木曜の朝には〔グラッセの編集者〕チュルパン嬢に全てを渡すことにする」と記されている¹⁰⁾。デュ・ボスはすでに1923年8月、ポンティニーで『一粒の麦もし死なずば』私家版初版の第2巻(1921年に13部のみ印刷)を著者から借り受け読み知っていたが¹¹⁾、ここでいう「校正刷と欠けていた8頁」とは、一般には未発表であったその第2巻のうちでも、おそらくはデュ・ボスが今回再読して強い印象を覚えたアルジェでのオスカー・ワイルド、アルフレッド・ダグラスとの出会いを語った部分のことを指す¹²⁾。この校正と補遺の確認・点検を主要な用件として送られたのが次のジッド宛書簡——

《書簡3》デュ・ボスのジッド宛¹³⁾

ビュデ通り1番地(4区)
(サン・ルイ島)

(パリ), 1925年1月22日〔木曜〕

親愛なる友

これがタイプ打ちの補遺を添えた校正刷です。それを再読いただき、必要があれば手を入れたうで、グラッセに渡せるよう出来るだけ早く私宛にご返送ください。

あなたとあのようなお話を交わらせて幸いでした。キュヴェルヴィルでいち早く『賈金つかい』を再開なさる力を見出され¹⁴⁾、首尾よく執筆をお進めになられますように。

私たち〔夫婦〕の愛情こもるメッセージを奥様にお伝えいただきたく。

衷心よりあなたの

シャルリ

あなたの元を辞去した後すぐに友人に会いましたが、その女性は私のために（手紙を返却するという）大きな犠牲を払うと——立派にも——申し出てくれました。[……]私が先々の費用を負担するということで承諾しました〔判読困難ナ箇所ガアルタメ、コノ文ノ意味ヤヤ定カナラズ〕。私はつねづね心底そう思っていました、彼女は感嘆すべき勇敢な女性であることを自ら証してみせたのです。私は彼女の生涯の友です。

とはいえ私としては、あなたが事の成り行きをお知りになりたかろうと思いましたので〔一言申し添える次第です〕。¹⁵⁾

まずはジッドの寄稿の成り行きについて——。事は決してデュ・ボスの思うようには進展せず、それどころか忽ちにして予期せぬ結末を迎えてしまう。すなわち、上掲書簡を受けた当日（22日）の夜、詳細な理由は不分明ながら、ジッドは早々と電話で「グラッセの遣り方が何とも承服しがたいため（彼はようやく今日になって事態に通じたようだ〔デュ・ボス註〕）、遺憾ながら『一粒の麦もし死なずば』の2章を公表する権利は引き上げる」と告げてくるのである。デュ・ボスとしては「ひどく当惑する」ばかりであったが¹⁶⁾、版元への不信が原因とはいえ、この頃から早くも両者の関係には微妙な影が射し始めていたことを示唆する一件でもあった。

次いで追伸——。ここで話題に挙がる女性は、デュ・ボスがポンティニーで知り合い、やがて年長の教師的立場を越え、ある時期からは深い愛情関係を結んだポール・デジャルダンの娘アンヌのこと。ふたりの関係は1924年夏には妻ジュリエット（愛称ゼゼット）との不和・軋轢の原因として顕現していたが¹⁷⁾、かかる事情はジッドにも打ち明けられていた（そのことは《書簡4》最終段落の記述からも明らか）。まもなくアンヌはデュ・ボスとの関係を解消し、この翌年には高等師範学校出身の青年ジャック・ウルゴンと結婚（以後は一貫してウルゴン＝デジャルダン姓を名乗る）、後年創立のスリジー＝ラ＝サル国際文化センターを舞台に、夫ともどもポンティニーの活動を継承・発展させることになる。

上掲書簡の4カ月後（5月23日）、デュ・ボスは「ある女性の友人宅で少数の聴き手を前にして」¹⁸⁾ ジッドとその作品にかんする講演を行っている。「女性の友人」とは、1913年にトレヴィーズ公爵家の一員エドゥアール・モルティメとの婚姻によって公爵夫人となっていたレトランジュ・トレヴィーズ（イヴォンヌ・ド・レトランジュ）のことで、デュ・ボスの講演は彼女のサロンで翌6月にかけて都合5回行われ、その後1929年刊の『アンドレ・ジッドとの対話』に収録されることになる（同書については《書簡7》に関連して後述）。次に訳出するのは、第1回の講演に自ら臨席し、デュ・ボスの言述に耳を傾けた作家が3日後に綴った書簡。多少の儀礼的修辭は含むとしても、少なくとも今回にかぎれば相手の洞察・分析をほぼ手放して称える内容であった——

《書簡4》ジッドのデュ・ボス宛¹⁹⁾

キュヴェルヴィル、[19]25年5月26日[火曜]

親愛なる友

〔土曜日の〕初回のご講演について私はあなたに実に拙くしか、少なくとも不十分にしか意見を伝えられなかったように思えます。私自身がその主題（対象）だからでしょうか……。あなたの心理的洞察力が、これほどまでにアンテナを遠く広げ、これほどまでに測鉛をしなやかで力強く、かつ繊細に下ろしたことはなかったように思えるのです。そのかたちそのものが、柔軟性を少しも失うことなく、いっそう確かなものと思えました。ニュアンスにおいてもこれ以上明確なものはありません、まさに批評の勝利、あるいはさらに言えば、肖像芸術の勝利であると私には思えます。きわめて有益にも、私はあなたを通じて自分の資質をいっそう明確に認識するようになりました。ええ、本当にあなたのおかげで、私は自分の倫理をさらにはっきり難じたいと願うようになり、それを定式化する方法が見え始めているのです。もし私がそのことに成功すれば、あなたは私を大いに助けてくださったことになります。おそらく私は〔コンゴ・チャドへの〕旅から、あなたが最初の数頁を気に入ってくださったあの『新しき糧』をほぼ完成して持ち帰ることになるでしょう²⁰⁾。それらの頁はお話を拝聴しながら私が考えていたもので、私のこれまでの著作が提示していた憂慮すべき疑問への答えをついに与えてくれたものでした。〔『新しき糧』を書きながら今後も〕あなたのことに思いを馳せることにいたします。私は己が幸福を得るだけでなく、他者が幸福を得る手助けをしたいと思っています。それは己の放棄、己への諦念にあると考えています。それゆえ、己が幸福だと感じることは何ほどのものでもない。幸福とは〔他者を〕幸福にすることであり、さもなくば神の御業も破綻すると私には思えるのです。私たちの努めはその御業の理を証することなのです。

うまく言いえていないとすれば、以上はすべて些か馬鹿げているように思われるかも知れません。再読すれば破いてしまいかねないので、この手紙はすぐにお送りする

ことにいたします。何よりもそこに大きな愛情の徴^{しるし}をお認めいただければと。

私はあなたの講演に感動するあまり、ゼゼットに彼女が抱える家庭内の心配事については何も申し上げることができないでいました。しかし、その疲労と憂慮に深く想いを馳せる妻からのメッセージを是非とも彼女にお伝えください。こちらはなべて事も無しですが、早くも出立間際のような気がしています——そして〔他者の幸福を願う〕私としてはもはや己の幸福への拘りはないのです。勿々

アンドレ・ジッド

第1段落の後半で触れられる構想・執筆中の『新しき糧』と、それが目指すべき「自己の放棄と他者の幸福」など一連の文言は、デュ・ボスの第2回講演（5月30日）でそのまま引用・紹介されることになる²¹⁾。付言すれば、独自のキリスト教観に支えられたジッドの幸福理念こそは、やがて彼をソヴィエト共産主義に対する共感へと導いてゆく要因でもあった。なお、最終段落の「ゼゼットが抱える家庭内の心配事」「疲労と憂慮」は、すでに触れたように、デュ・ボスとアンヌ・デジャルダンの不倫関係を踏まえての発言である。

＊

上掲書簡に先立つ4月末にアフリカ旅行の資金調達をかねて蔵書の一部を競売に付したジッドは、6月8日ついに『贖金つかい』を脱稿（刊本の出来は翌年2月）、7月14日マルク・アレグレとともにコンゴおよびチャドへの長旅に出発する（フランスには翌年5月に帰国するが、まもなく旅先で目にした大認可企業の搾取と植民地政策の不当を告発するキャンペーンを開始したのは周知のとおり）。次に引くのは、旅行中にデュ・ボスに宛てられた2通の短信で、第1信は、8月半ばから9月初旬にかけてコンゴのブラザヴィル、キンシャサを訪れた後、数日間滞在したコキアヴィルから發送された絵ハガキ——

《書簡5》ジッドのデュ・ボス夫妻宛²²⁾

〔コンゴ〕、エクアトールヴィル州コキアヴィル

〔1925年〕9月13日〔日曜〕

親愛なる友たち
我らが想いの丈を込めて

アンドレ・ジッド
マルク・アレグレ
レトランジュ・トレヴィーズ

差出人としてジッド、マルクとともに名を連ねるレトランジュ・トレヴィーズは、すでに述べたように、デュ・ボスが4カ月ほど前、彼女のサロンで講演を行ったさいにジッドと知り合っていた。当時、夫人は予防接種キャンペーンのためにパスツール研究所の衛生使節団とともにコンゴに向かっていていたが、8月下旬ブラザヴィールでジッドらと合流、9月30日までコキアヴィール、バンギで彼らと行動を共にした（その間マルクと関係を結び、後には彼とのあいだに一見をもうける）。ちなみにジッドは8月30日付のデュ・ボス宛で彼女のことを次のように記している——「私は当地でトレヴィーズ公爵夫人に再会できて大変嬉しく思いました。その素朴さ、誠実さ、率直さは植民地の環境と心地よい対照をなしています」²³⁾。

アフリカからの第2信として翌月には、郵送に要する日数を考慮して移動先のバンギから早々とクリスマスと新年を祝う絵ハガキが送られている——

《書簡6》ジッドのデュ・ボス夫妻宛²⁴⁾

〔フランス領赤道アフリカ〕、バンギ

〔19〕25年10月20日〔火曜〕

親愛なる友たち

遠く離れていますので、これ以上〔お便りを差し上げるのを〕先送りするには及ばずまい。お三方皆さまが幸せなクリスマスと新年をお迎えになられますように。

匆々

アンドレ・ジッド

私とともにマルクからも厚き想いをお伝えします。

なお、文中「お三方皆さま」とあるのは、デュ・ボス夫妻の幼い娘プリムローズ（1919年生まれ）を含めての呼びかけである。

＊

ジッドは大戦中の深刻な宗教的危機を赤裸々に綴った匿名私家版『汝もまた……？』（1922年刊）をデュ・ボスに献じていたが²⁵⁾、1927年に後者がカトリックに回心したことを契機として、ふたりの関係には小さからぬ変化が生じる。1929年5月、デュ・ボスはジッドについて論じていた5つの講演録（前述）と近作の論考をまとめて『アンドレ・ジッドとの対話』を出版。とりわけ1924-1926年刊の3作『一粒の麦もし死なずば』『コリドン』『贖金つかい』を扱った180頁にもおよぶ第4章「透かし彫りの迷宮」は、同性愛を公言・弁護する作

家に対する厳しい批判と戒めであった。この一件によって彼らの関係が途絶することはないが、かつては親密だった友情に俄に暗い影が射し始めたことは否めない。じじつ 1931 年以降、ジッドの『日記』にデュ・ボスの名が挙がることはほとんど絶えてなくなるのである（いっぽうデュ・ボスの『日記』にジッドの名は継続して登場しはするが、その頻度は過去 10 年に比べると 10 分の 1 ほどに減少する）²⁶⁾。

とはいえ、デュ・ボスは『アンドレ・ジッドとの対話』出版のおよそ 8 カ月前には、マリア・ヴァン・リセルベルグに自著執筆の意図、わけでも「透かし彫りの迷宮」の意図を説明し、またそれが彼女を介してジッドに伝わることを願って次のような長い書簡を認めていた。作家と批評家との微妙な関係を窺わせる資料である——

《書簡 7》デュ・ボスのマリア・ヴァン・リセルベルグ宛²⁷⁾

〔ホテル〕トリアノン・パラス
ヴェルサイユ

1928 年 10 月 2 日火曜

親愛なる友

私はあなたに二重の恩があり、まさにそのご恩に大いに感謝している者であります。というのも第一に、あなたが我々の対話の内容をジッドにしっかりと伝えてくださったおかげで、昨日〔彼から〕実に貴重な手紙を受け取ることができましたし²⁸⁾、またあなたご自身も私に手紙を書いてくださいましたが、今日届いたそのお手紙は、私にとっては〔ジッドのそれと〕同様に貴重なものであるからです。

すべてが互いの理解を妨げるかのように思えていただけに、先日の夜、あれほどまでに理解し合えたという事実は、我々を結びつける絆が有効で危うからぬことを証するものです。私はジッドの気持ちを疑っておりませんし、あなたのおかげで彼ももう私の気持ちを疑っていません。私は彼に長い手紙を書いたところですが、おそらく彼はあなたにその内容を伝えることでしょうし、私としても彼があなたに伝えてくれれば嬉しく思います。先々彼の意向次第で対話の再開を妨げるものは何もない、そう思える理由を説明しておくべきだと考えたのですが、仰せのとおり、彼が当面のあいだは対話再開を望んでいないことは私も承知しております。私は今、我々ふたりが予測できない、そして先取りすべきではないある時点になれば、互いの友情が損なわれてはおらぬことを認め合えるという希望——そうなるには、あなたが大きく関与されているはずですが——を抱いております。

ご想像いただけるような、ひどく複雑で強い苦痛をとまなう考察を終え、ここに至ってようやく私が拙著〔『ジッドとの対話』〕の出版を決意したのは、〔そこには〕個人的な要因は何ら介在していない、有難くもあなたがそう見抜いてくださったことにくわ

え、事は結局のところ、我々のいずれもがひどく苦しんできただけに、この現状もいずれはそれなりに正常化してゆくだろうと私なりに希望を抱いているからです。我々のいずれもが（いたって当然のことながら）ただ『透かし彫りの迷宮』〔の部分〕にだけ注意を向けていたため、最終的にはお互い拙著の総体に対する感覚、その内的構成や（エマーソンの意味での）償い²⁹⁾に対する感覚をいささか失うことになってしまったのです。そして、何ら予断を述べるものではありませんが、出版されたさいには拙著全体が我々にはかなり異ったものに見えたとしても、私としては別段驚くことはないでしょう。いずれにせよ、ジッドが『バイロン』の献辞を受け入れたことは——そしてそのことに対して私はあなた方お二人に満腔の感謝の念を抱いておりますが——いみじくもジッドが私に書いてきたように、「非難〔の連鎖〕を断ち切った」だけでなく、親密さという点で最も好ましい兆し（??）となります。ジッドへの手紙で触れたように³⁰⁾、私は版元にこの2冊〔『ジッドとの対話』と『バイロン』〕が同じ日に出版されるように強く依頼します。2月1日頃になるでしょう。

献辞にかんしては、ご判断は私を本当に安堵させてくださるものですが、手放して賛同はできかねます。したがって引越にさいしては、この本はすすんで外し、サン・ルイ島に残しておき、ヴェルサイユにはジッドとあなたが率直にもてなしを受けていただけるものだけを持ってゆくことにいたします。一方、ニーチェ〔にかんする拙著〕はあなた方のものです。ちょうど昨日、出版の手配をしたところです。出るのは1929年の6月か、さらに可能性の高いところでは11月ということになるでしょう。まだ書いておりませんが、前書きと結論を添えざるをえないとしても、拙著の本体を構成する1924年1月から2月の〔ギイ・ド・ブルタレス夫妻のサロンで行ったニーチェにかんする〕6つの講演は、私が話したままのかたちとなります。これら6つの講演にかんしては、我々のあいだに意見の相違がありうとは思いません。

先日の晩、我々是对話の後半でとても深刻な話をしなければならなかったのも、〔透かし彫りの〕迷宮〕を詳しくお読みくださったご配慮と（そのさいの）熱意に対して、また同様に、あなたが『迷宮』から示唆を受けた考察に対しても、十分に感謝申し上げなかったことを後悔しております。組版に回す前に、私自身も最後にもう一度読み直しますが、たとえご指摘を容れられぬ場合であっても、常にそれを念頭に置いて再読する旨を明言いたします。付け加えますと、私が行っている最終的な変更は、何よりも〔ジャック・〕マリタンが練ってくれ、私も全面的に同意する〔論調〕緩和策に啓発されたものです³¹⁾。

私には果たすべき義務がひとつだけ残っているのですが、〔そのためには〕状況から見て、改めてあなたにお願いしなければなりません。1927年11月〔正しくは10月末〕の手紙でジッドは私に次のように書いていました——「もし差し支えなければ出版される前にすべてを拝見したい」³²⁾。言うまでもなく、私はすぐにこの要望に応えました。彼は今、『透かし彫りの迷宮』の末尾12頁を除き、すべて〔の原稿〕を手にしています。これらの頁は9月半ば、〔彼が拙著巻末の原稿〕「献辞書簡（lettre-envoi）」を受けとった後の沈黙期間中に書かれたものですが、その結果、私は次のようなジレン

マに直面することになりました。すなわち、彼にこれらの頁を送らないことで約束を違^{たが}えるか、あるいは約束を果たすことで、彼に新たな攻撃、意図的なだけに完全に侮蔑的な挑発と思えるような攻撃を加えてしまうか。〔ジッドの〕沈黙が続いたので、私は控えるべきだと思っていました。今日あなたのおかげで沈黙は破れましたが、その一方で、傷を再び開いてしまうことを怖れて、最も賢明な解決策——おそらく考える唯一の解決策——はこれらの頁をあなたにお渡しし、それをお読みいただいたうえで、ジッドに回すべきか否かの判断をもつばらあなたに委ねるべきではないかと考えたのです。仮に否定的なご判断の場合には、私が約束を忘れていたわけではないこと、約束どおりにしなかったのは、ただ彼を不必要に傷つけないためである旨を出版前に彼に伝えるのは、あなたにとって容易いことではないでしょうか。この解決策があなたにとって辛いものであるか、また、このような新たな試練をあなたに負わせることになったのを申し訳なく思っています。しかし、どうすればよいのでしょうか？ 結局のところ、あなたと私の共通の願いはただひとつ、良い方にはないにしても、少なくとも悪くはない方に向かつての行動です。という訳で、たまたまこの手紙と一緒にタイプ打ちした写しをお届けします。いずれにせよ、彼が読もうが読ままいが、これらの頁はタイプ打ちの写しであり、ジッドの所有に帰するものです。したがって私に返却なさるには及びません。『透かし彫りの迷宮』の結論であるだけに、これらの頁が、嗚呼^{ああ}！ あなた方のいずれにとってもただただ痛ましいものであることは言うまでもありません。しかし最後の5-6頁には、「猷辞書簡」に対応する前であったならば、殉教者というこの不幸な観念にかんしジッドがかなり敏感だったろうと思われる一節があります。ですが以後のことは私にはもう分かりません。その点については、あなたならば私よりもずっと良い判断を下されることでしょう。

親愛なる友よ、もちろんのこと、たとえ何も備わってなくともヴェルサイユのアパルトマンにお迎えしたいところですが、たまたま今週末から絨毯を敷き始める予定でおりまして、Z〔ゼゼット〕としては、空部屋であってもフェルトを敷いた状態であなたをお迎えるする方を望むことでしょう。おそらく次の週末になりますが、すぐにお知らせします。

Z〔ゼゼット〕が最も友好的な想いをあなたにお送ります。あらためてお礼申し上げます。あなたの方でも私の深い愛着の念をお知りおきいただきたく。

あなたの

シャルリ

まず第3段落に挙がる『バイロン』（正確には『バイロンと宿命の必要性』）について若干の補説を加えておくと、同著はデュ・ボスがつねづね愛唱していた英国詩人について1925年12月から翌年1月に友人の作家ギイ・ド・ブルタレス宅で、次いで5月から6月にかけて画家のジャック＝エミール・ブランシュ宅で行っていた計6回の講演を一書として纏めたもの（実際の出版は予定

より遅れ、この翌年〔1929年〕の5月29日に刷了、同月15日刷了の『ジッドとの対話』とともに6月に出来^{しゅったい}。訳出文中にあるように、その冒頭には次のような前年末に書かれたジッドへの献辞書簡が掲げられる³³⁾——

親愛なる友

アンドレ・ジッドに

あなたは、あなたとの『対話』と同じ日に出版される本書の献呈を快く承諾してくださいました。我々の対話のなかにパイロンの名前が挙がった覚えが私にないとしても——サン＝ルイ島〔の拙宅〕においでになったある日、セーヌ河岸で〔パイロンにかんするトマス・〕メドウィンの本の翻訳³⁴⁾を見つけ、「これは当然あなたのものです」と言い添えて私に差し出してくださったご厚意の記憶でなければですが——これらの頁〔拙著〕は、すでに我々の対話に適していたあの公園で、忘却の埋め合わせをする機会を我々に与えてくれましょう。そのとき拙著は二重に目的を果たしたことになります。すなわち、私にとって如何に大切なものか、あなたもよくご存じの喜びを私にもたらし、また我々の揺るぎない愛情の証を私に与えてくれることになるのです。

C. D. B.

ヴェルサイユ、1928年12月27日

この献辞への言わば返礼として、ジッドの方は翌6月、巻頭に「我が友シャルル・デュ・ボスに／サン＝ルイ島の思い出に」なる献辞を掲げて、自著『モンテニュ論』をデュ・ボスに捧げることになる³⁵⁾。

第4段落で言及されるニーチェについても一言——。1900年にこの哲学者の思想に接したデュ・ボスは、以後もその著作を読み続けていた。『日記』に最も頻繁にニーチェの名が挙がるのは1924年のことで、同年にはコレージュ・ド・フランス教授シャルル・アンドレールの大冊『ニーチェ、その生と思想』を熱心に読み込み³⁶⁾、教授の講義にも出席している。書簡にあるように、彼がギイ・ド・プルタレス宅でニーチェにかんする連続講演を行ったのはまさにこの時期のことだったのである。ただしデュ・ボス自身の企図にもかかわらず、それらの講演録が一書に纏まる機会はずいに訪れることはなかった³⁷⁾。

＊

最後に訳出・引用するのは、アメリカに生まれイギリスで活躍した作家・小説家ヘンリー・ジェイムズの話題をめぐってジッドがデュ・ボスに宛てた書簡。もっとも文面の大半を占めるのは、イギリス人女性ドロシー・ビュッシー（フランス人画家シモン・ビュッシーの妻で、ジッド作品数点の英訳者）がジェイ

ムズを論じたジッド宛からの引用である。

よく知られるように、すでにジッドはロンドン滞在中の1912年末に批評家エドモンド・ゴス宅での晩餐でジェイムズの面識を得ていた。またデュ・ボスの方は1922年、妻との共訳で中編小説『巨匠の教訓』を一般読者に向けて紹介することになる³⁸⁾。かような両者が当該作家について長時間にわたり会話を交わしたのは1920年10月5日のこと³⁹⁾。そしてその15年後にデュ・ボスに宛てられたジッド書簡が今回紹介する新資料である（ビュッシー夫人の書簡からの引用については一部を省略して訳出）――

《書簡8》ジッドのデュ・ボス宛⁴⁰⁾

〔パリ、19〕35年6月20日〔木曜〕

親愛なる友

ヘンリー・ジェイムズにかんする私たちの会話（嗚呼！すでに何と前のことでしよう！）の思い出として、あなたにも喜んでいただけるだろうと、ドロシー・シモン・ビュッシーの見事な手紙から次の長い一節の写しをお送りせずにはおれません――

《私はとても素晴らしい本を読んでいます。ご存知の本かとも思いますが、この20年間ずっと読みたいと思っていましたが、高価なため読むことができなかったのです。ヘンリー・ジェイムズが小説大全の各巻に付していたエッセイの集成ですが、これらの序文が発売されたばかりの一卷に纏められたのです⁴¹⁾。ご存じない場合は、お送りしたいと思いますのでお知らせください。しかし、あなたはご存じだったはずです。おそらく『贗金つかいの日記』の芽さえもそこから生まれたのでしょうか。しばらく眠っていたジェイムズへの私の賞賛が大いに増幅され再び目覚めました。そして私は今、彼は小説家としてよりも芸術思想家として偉大なのではないかと考えています。ですが、それは最近どの小説にも目を通していないせいかも知れません。いずれにせよ小説の創作という点では、彼の知性、創作のあらゆる面に対する認識は広大かつ深遠で、お望みのどんな贅沢な形容詞にも当てはまるものです。たとえば現在あなたや他の芸術家を悩ませているすべての問題は、あなた方にとって同じように、当時の彼にとってアクチュアルなものでした。ミルスキは、イギリスの知識人について最近書いた本のなかで⁴²⁾（新たな大家たちに好意を示すためでしょうが）実に悍ましいやり方でジェイムズのことを軽蔑的に語り、この偉大な知性、このスノップで浮薄なところがありながらも純粹で深遠な精神を非難しています。そのため私は、取るに足らぬ愚かな輩だけにこのミルスキのことを本当に憎むようになりました。[…]

親愛なるジッド、しかしジェイムズについても一言。彼の文章だけでもその美しさは驚嘆すべきものであり、最高度のものであると私には思えます。難解すぎる――いや、[たしかに] 複雑でドイツ語と同じくらい理解するのが難しいということはしばしばあります。しかしそれは当然であり、内容自体が非常に重要な場合には、ゆっく

りと読みを進め、文章を吟味し、すべての糸を解きほぐすことを求められるのは好ましいことだからです。そして多くの場合、読み手はあらゆる種類の賞賛の念に満たされるようになるのです。》

匆々 アンドレ・ジッド

なお、この書簡に対するデュ・ボスの反応は彼の『日記』には見当たらない。またジッドへの返信もこれまでのところ存在が確認されていない。

*

冒頭で述べたように本稿では、新たに確認されたジッドとデュ・ボスの未刊書簡の訳出・提示にあたり、簡略な補説と附註を添えるにとどめている。そのため限られた紙幅では、両者の基本的な資質の相違や、彼らのあいだで交わされた「論争」の多様な側面、その具体的な変遷にかんしては遺憾ながら十分な検討を加えることは叶わなかった。この点について大方のご寛恕を乞う。

註

- 1) *Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, [éd. Juliette Ch. Du Bos], Paris : Corrêa, 1950.
- 2) 拙稿「ジッドのシャルル・デュ・ボス宛未刊書簡」, 『ステラ』第40号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2021年12月, 225-234頁を参照されたい。
- 3) Voir André GIDE, «Journal du Foyer Franco-Belge» (Document présenté par Pierre MASSON), *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 134, avril 2002, p. 153.
- 4) Lettre autographe signée (sur papier à en-tête du «Foyer Franco-Belge»), Fondation Catherine Gide, cote 03-02-a. Très fragmentairement reproduite dans *André Gide*, cat. expo., Paris : Bibliothèque Nationale, 1970, p. 137, item n° 467 ; *Présence d'André Gide*, cat. expo., Bruxelles : Bibliothèque Royale Albert I^{er}, p. 79, item n° 227.
- 5) 1853年にパリ郊外のクリシー（ヌイイ通り17番地）で創業し、1901年からは匿名会社としてパリに本拠を置いたチョコレート製造所。現在は存在せず。
- 6) Voir André GIDE, «Journal du Foyer Franco-Belge», document précité, p. 152 ; Georges de LAURIS, *Souvenirs d'une belle époque*, Paris : Amiot-Dumont, 1948, pp. 187-191.
- 7) Lettre autographe signée (sur papier à en-tête du «Foyer Franco-Belge»), Fondation Catherine Gide, cote P-01-j.
- 8) André GIDE, *Journal I (1887-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 1166.

- 9) 戦後のボンティニー旬日懇話会の方向性を決定づけることになった1922年の催しについては次の拙稿を参照されたい——吉井亮雄『ジッドとその時代』（九州大学出版会、2019年）、第Ⅳ部・第1章「ジッドとポール・デジャルダン——1922年の「ボンティニー旬日懇話会」を中心に——」、397-412頁。
- 10) Charles Du Bos, *Journal (1920-1939)*, nouvelle éd. en 3 vol., Paris : Buchet / Chastel, 2003-2005, t. I (1920-1925), pp. 801-802. デュ・ボスの引用に先立つジッド書簡の一節は次のとおり——「我々の会話の記憶は今でも私の瞑想の糧となっています。これまで我々は何でも語り合えていましたが、にもかかわらず私としては、あなたがご本において危険な場所に足を踏み入れようとなさっていることに懸念を抱かぬわけではありません。たしかにそこでご自身の力不足を示すのも結構なことかも知れませんが、私としては印刷にお返しになる前に再度ご本を拝見してみたいのです」。
- 11) *Ibid.*, pp. 805-806 [20 janvier 1925].
- 12) 公刊版の第2部・第2章を中心とする部分。なお、初めての流布版となる『一粒の麦』の新フランス評論版（3巻本）は1924年には印刷されていたものの、実際の発売はスキャンダル招来を懸念して1926年10月まで延期されるので、ジッドの「回想録」はこの時点では依然として未発表の状態であった。
- 13) Lettre autographe signée, coll. particulière.
- 14) デュ・ボスは前年9月にキュヴェルヴィルにジッドを訪ねたさいに、『贋金つかい』のなかの「エドゥアールの日記」の一節を読み知っていた。Voir Du Bos, *Journal (1920-1939)*, *op. cit.*, t. I, p. 699.
- 15) 母親がイギリス人、また母方の祖父もイギリス人、祖母はアメリカ人であったデュ・ボスは英語をなんら不自由なく操ったが（じっさい彼の『日記』はしばしば英語で綴られる）、この追伸も英語で記されている。以下がその原文——«On leaving you I saw my friend who proposed that for me — famously — she should accomplish her great sacrifice (of giving back the letters). I accepted par [...] avenir à mes frais. She has proved herself the admirable and courageous girl that deep down I always knew her to be. I am her friend for life. / But I thought you would like to know how things stand.»
- 16) Du Bos, *Journal (1920-1939)*, *op. cit.*, t. I, p. 815.
- 17) アンヌとの愛情関係、それにともなう妻ジュリエットとの不和・軋轢については、最近公刊された次の研究に詳しい——Louis PAILLOUX, *Charles Du Bos, un homme sans œuvre ?*, Paris : Honoré Champion, 2024, pp. 498-507.
- 18) Charles Du Bos, *Le Dialogue avec André Gide*, Paris : Au Sans Pareil, 1929, p. X.
- 19) Lettre autographe signée, coll. particulière. Fragmentairement reproduite in André GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques, II*. Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009, p. 1323.

- 20) 『新しき糧』(1935 年刊)の構想は、きわめて漠然としたものながら 1922 年にはすでにジッ드의意識の内にあった。同年 7 月 12 日の『日記』——「今、私が書きたいと思うのは『新しき糧』だ。ところでこれは思わず出来たという風にしか書けないだろう。これほど計画なしの作品はあるまい」(GIDE, *Journal I (1889-1925)*, *op. cit.*, p. 1178)。
- 21) Voir DU BOS, *Le Dialogue avec André Gide*, *op. cit.*, pp. 56-57.
- 22) Carte postale autographe signée, coll. particulière.
- 23) *Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, *op. cit.*, p. 90.
- 24) Carte postale autographe signée, coll. particulière.
- 25) 以下がその献辞——「シャルル・デュ・ボスに捧ぐ / 親愛なる友よ、これら数頁の冒頭にあなたの名を掲げるのをお許しいただきたい。困難な時期にあなたの友情が私を支えてくれたのだから。ある日あなたが氣にとめてくれなかったなら、それらは抽斗ひきだしの底にしまわれたままになっていたことだろう」(*Numquid et tu...?*, dans *Journal I (1887-1925)*, *op. cit.*, p. 986)。
- 26) Voir André GIDE, *Journal II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1997 ; Charles DU BOS, *Journal (1920-1939)*, *op. cit.*
- 27) Lettre dactylographiée signée, Fondation Catherine Gide, cote 30-01-C-11.
- 28) Voir la lettre de Gide datée du 28 septembre 1928, in *Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, *op. cit.*, pp. 147-148. これに先立ち、9 月 26 日にデュ・ボスの訪問を受けたマリアは、翌 27 日には早速その時の模様をジッドに伝えていた (voir [Maria VAN RYSELBERGHE], *Les Cahiers de la Petite Dame. Notes pour l'histoire authentique d'André Gide* [éd. Claude MARTIN], 4 vol., Paris : Gallimard, coll. «Cahiers André Gide» n^{os} 4-7, 1973-1977, t. I, p. 370)。
- 29) アメリカの思想家・哲学者で、超絶主義の先導者ラルフ・ワルド・エマーソン (1803-1882) が 1841 年発表のエッセイ「償い・代償 (Compensation)」において唱えた因果関係と二元論の効用にかんする理論。
- 30) このデュ・ボス書簡は保存が確認されていないが、ジッドは 9 月 28 日付の返信 (前註 28 参照) で献辞の申し出を謝し、これに対しデュ・ボスは 10 月 2 日付の長い書簡の末尾で相手の受諾に礼を述べている。Voir *Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, *op. cit.*, pp. 148 et 158.
- 31) ジャック・マリタンはデュ・ボスの親しい友人のひとりであったが、「透かし彫りの迷宮」の修正協力について具体的なところは残念ながら不詳。
- 32) *Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, *op. cit.*, p. 126.
- 33) Charles DU BOS, *Byron et le besoin de la fatalité*, Paris : Au Sans Pareil, 1929 [ach. d'impr. 25 mai 1929], p. 17. この献辞書簡は引用されることが稀である。それに対し文言の異なる同日付のジッド宛短信が以下に採録されている—— *Charles Du Bos*. Inédits de Charles Du Bos et de André Gide, Paris : FAC éditions,

- 1985, p. 133.
- 34) *Les Conversations de Lord Byron*, recueillies par M. [Thomas] MEDWIN ou *Mémorial d'un séjour à Pise auprès de lord Byron contenant des anecdotes curieuses sur le noble lord*, publié en français par M. A. P[ICHOT], 2 vol., Paris : Ladvoat, 1824.
 - 35) Voir André GIDE, *Essai sur Montaigne*, Paris : Jacques Schiffrin, Éd. de la Pléiade, 1929 [ach. d'impr. 29 mai 1929]. 同著献呈の予告については1929年1月2日付のデュ・ボス宛を参照 (*Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, *op. cit.*, p. 169)。
 - 36) Voir Charles ANDLER, *Nietzsche, sa vie et sa pensée*, 6 vol. Paris : Bossard, 1920-1931. 当時デュ・ボスが読んでいたのは全6巻のうち既刊の4巻 (1920-1922年刊の第1-3巻と第5巻)。
 - 37) なおデュ・ボスがニーチェを論じたテキストとしては、いずれも彼の没後に印刷公表されたものだが、以下を参照—— Charles DU BOS, «Nietzsche», *La Table ronde*, n° 4, avril 1948, pp. 563-580 ; «Le drame Wagner-Nietzsche», *Bulletin de la Société d'Études nietzschéennes*, n° 3/4, 1948, pp. 30-34 ; «Trois fragments inédits de Du Bos sur Nietzsche», *Revue des lettres modernes*, n°s 54-55, été 1960, pp. 93-110 (このうち «Ouverture» と題された断章は、デュ・ボスが1924年1月18日に行った講演の冒頭部) ; «Nietzsche und die Leitbilder» (trad. Edgar KOLBINGER), *Schweizer Rundschau*, 1964, 63 (9), pp. 520-530 (デュ・ボスが準備していた著書の第2章のドイツ語訳)。
 - 38) Voir Henry JAMES, «La Leçon du maître» (traduit de l'anglais par [M. et] Mme Ch. DU BOS), *La Revue hebdomadaire*, 31^e année, n°s 31-33, 5, 12 et 19 août 1922, pp. 5-43, 155-185 et 339-354.
 - 39) Voir GIDE, *Journal I (1887-1925)*, *op. cit.*, p. 1110 (mardi [5] octobre 1920). なお同日のデュ・ボスの『日記』にはこの会話についての詳細な報告がある (voir son *Journal (1920-1939)*, *op. cit.*, t. I, pp. 51-58)。Voir aussi la lettre de Gide à Du Bos, de septembre 1920, recueillie dans *Divers*, Paris : Gallimard, 1931, pp. 127-133 et au tome X (1936) des *Œuvres complètes*, pp. 547-550.
 - 40) Lettre autographe signée (avec une longue citation en anglais), coll. particulière. 書簡テキストの大半を占めるビュッシー夫人の6月16日付ジッド宛は全文が英語で記されている (いっぽう公刊されたジッドとの『往復書簡集』全3巻においては、他のジッド宛と同様、ジャン・ランペールによってフランス語に翻訳されている)。Voir André GIDE - Dorothy BUSSY, *Correspondance (1918-1951)*, éd. Jean LAMBERT et Richard TEDESCHI, Paris : Gallimard, 3 vol., 1979-82, t. II, pp. 578-580.
 - 41) Henry JAMES, *The Art of the Novel : critical prefaces*. With an introduction by Richard P. BLACKMUR, London : C. Scribner's Son, 1935.
 - 42) Dmitri MIRSKY, *The Intelligentsia of Great Britain*. Translated by Alec BROWN, London : V. Gollancz, 1935.